

日本の手織機 便り

2004年6月

第2号



3月に日本の手織機便り第1号をお送りしましたが、如何でしたでしょうか。早速反応がありまして、西脇市郷土資料館の池田忠詮氏より次のようなご連絡をいただきました。

ながはた

長機を探しております。

『昭和3年播州織同業組合が発行した「播州織同業組合沿革史」に、播州織の始まりについて我が播州織物は、寛政四年多可郡比延庄村の人、飛驒安兵衛翁によって伝えられ...天明八年、

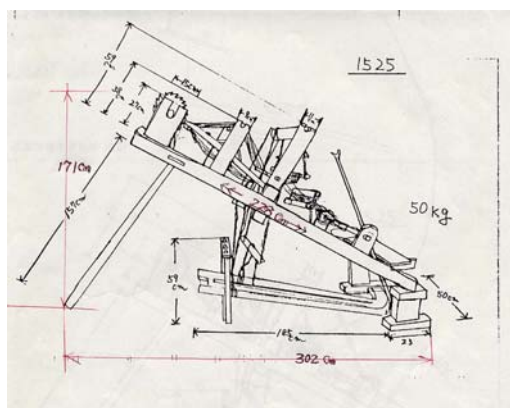
京都大火の際上洛して造営の事に従う...織機の製作を習得して帰郷し、これに自己の考案を加えて一機を創案し、長機と名づけ...』

とあるのですが、この地域には現存する長機がありません。色々の書籍を探したのですが、たった一つ「石川県立白山ろく民俗資料館」の織機写真の説明に「長機 ハタゴ (傾斜型のいざり機)」と説明された古織機の写真があり、西脇からメールで質問しましたら長さが3mあるとの事で、私たちの探した長機の本織機でないかと思っています。

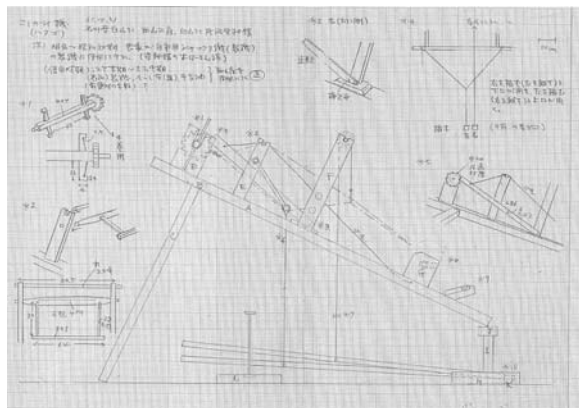


石川県白峰地方のハタゴ

第1号にも書きましたように、繊維博物館では重松氏の手織機実測図を入手いたしましたので、重松氏による「石川県立白山ろく民俗資料館」所蔵のハタゴの製図を池田氏にお送りしました。



現在の白山ろく民俗資料館のハタゴ
実測 (同館提供)



重松氏によるハタゴ製図 (部分)
(昭和61.10.21 調査)

この2つの図を比較すると、異なっているのは脚の部分の長さのみで、現在のものは20年前より24cmほど長くなっています。脚の取り付け位置は同じですので、勾配が急になっているかあるいは脚の接地部分が後方になっているかが考えられます。全長が現在のものは3mあり、重松製図では2.6mですので、後者と思われます。手織機は手作りですので、規格が決まっている訳ではなく、同じ「ハタゴ」でもこの程度の差はいくらでもあると思います。

ながはた
長機についての情報をご存知の方がいらっしゃいましたら、お知らせ下さい。

手織機情報紹介

高機 福島県安達郡本宮町 本宮町立歴史民俗資料館所蔵

昭和初期のもの。昭和20年ごろまでは木綿糸をカリヤス等の植物で染色し、織って農作業着等に使用していた。材料がなくなったため、その後は使われず昭和50年に資料館に寄贈された。現在は展示スペースがないため、分解して収蔵されている。

—本宮町立歴史民俗資料館 長谷川 正氏より



高機 石川県羽咋市 金丸出資料館所蔵

能登地方は江戸時代から麻織りが盛んで能登上布や縮などが鹿島、羽咋地方で生産された。昭和初期が最盛期で全国一の生産を誇ったが、第二次大戦後は衰退。この高機は男巻部分に鋳物を使った改良型で、昭和期以降の機である。

金丸出資料館は羽咋市金丸出町町会の有志が集まって作った資料館で、見学を希望する場合は事前に羽咋市歴史民俗

資料館に申し込みれば開館する。

—羽咋市歴史民俗資料館 山田純子氏より

繊維博物館からのお知らせ

日本の手織機の研究はこれまでに引き続き、平成16年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり」の研究費の交付を受けました。重松手織機模型の研究をまとめ、印刷物として刊行する予定です。皆様のご協力を今後ともよろしくお願い致します。

重松手織機模型の原機所在地リストの住居表示変更をお知らせします。

11 群馬県立歴史博物館 〒370-1293 群馬県高崎市綿貫町 992-1

34 京丹後市（網野町）立郷土博物館 〒629-3241 京都府京丹後市網野町木津 823

この4月に担当者の方の異動やその他の変更事項がありましたらお知らせ下さい。

今回ご紹介しました西脇市郷土資料館と石川県立白山ろく民俗資料館の交流には前回お送りした重松手織機模型原機所在地リストが役に立ちました。今後このような交流がさらに盛んになることを期待しております。

日本の手織機便り 第2号

発行 東京都小金井市中町 2-24-16 東京農工大学工学部附属繊維博物館 田中鶴代

発行日 平成16年6月15日

カットは国貞：江戸名所百人美女（繊維博物館所蔵）

腰機 徳島市 徳島県立博物館所蔵

徳島県木頭村では樹皮繊維を原料とする古代布「太布」を織り、明治期でも衣料として、大正期にも穀物袋などに用いてきた。使われていた手織機は傾斜型の腰機である。太布織の技術は保存会などで伝承されている。

館所蔵の機は腰掛ける部分がはずれた状態で収蔵され、現在は展示されていない。 —徳島県立博物館 庄武憲子氏より

